

一 次の問いに答えなさい。

問一 後のA・Bの語群から漢字一字ずつを使って、ア～オの類義語（意味の似通っている語）を完成させなさい。なお、同じ漢字は一度しか使つてはいけません。

ア 遺品 イ 技量 ウ 感心 エ 突然^{とつぜん} オ 重宝

A		B	
理・手・努・分	利・解・腕・見		
便・形・敬・不	別・頭・刻・意		
試・冷	力・服		

問二 次のことわざの中で、意味が正反対の組み合わせが四組できます。組を作れないものを二つ選び、番号で答えなさい。

- 1 あぶはちとらず
- 2 好きこそ物の上手なれ
- 3 案ずるより産むが易い^{やす}
- 4 善は急げ
- 5 泣きつ面に峰^{たかね}
- 6 下手の横好き
- 7 一石二鳥
- 8 石橋をたたいて渡る^{わた}
- 9 馬の耳に念仏
- 10 せいては事を仕損じる

問三 次の——線部の敬語の使い方には誤りがあります。それぞれ（ ）内の字数で正しく直してすべてひらがなで答えなさい。

- 1 クラスの友達と先生のお宅へいらつしやる。(四字)
- 2 先生は私たちのおしゃべりを楽しそうにおききしていた。(六字)
- 3 私たちは先生の奥さんの手作りケーキをめしあがった。(五字)

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 ※本文は出題の都合上、原文を一部省略・改変してあります。

脳の研究が続いていると、既存の常識を覆すような意外な事実がつきつぎに発見されます。最先端の現場で真実を知る驚き、真実を追究する高揚感——これは脳科学の醍醐味です。一度でも脳研究の快感を味わうと、もうやめられなくなります。そんなワクワク感をみなさんにもぜひ味わってほしいと思っています。

I 脳科学者である私がよく受ける質問が三つあります。一つ目は「なぜ脳の研究を薬学部でやっているのですか」です。私は東京大学の薬学部で研究をしています。一般には「薬学部」というと、薬だけを専門にする学問だと思われてしまうのかもしれませんが。しかし、薬をつくるためには、当然ですが、体の仕組みを知らねばなりません。体のどんな異常が起こると病気になるかがわかれば、よりよい薬をつくることができますでしょう。

私の場合は将来、脳の病気を、とりわけ老人ボケなどの認知症（痴呆疾患）を治療する薬をつくることを目指しています。しかし現状では脳の仕組みはあまり解明されていません。薬を開発するためには、まず脳を知り、脳をきわめることが肝心です。そのようなわけで私は薬学部で脳の研究をしています。

脳研究は、医学部や理学部や工学部など、さまざまな分野で行なわれています。似たような脳研究が異なった学部で並行して行なわれているケースもよくありますが、巨視的な意味では「目的」が異なっていることが多いのではないのでしょうか。医学部では病気の治療を目的にしている研究者もいるでしょうし、理学部では純粋に脳のことがもっと知りたいから研究をしている人もいます。工学部ではロボットや人工知能をつくるために脳を研究している人もいます。脳研究はどの学部でも行なうことができますが、自分が何をしたいのかという目的が、学部を選ぶキーポイントになると思います。

次によく聞かれる質問は「将来、脳の研究をするためには、学生ときにはどんな勉強をしたらよいのでしょうか」です。脳研究に限らないと思うのですが、もし何かの専門職に就きたいのならば、就職前はあえてその専門以外の勉強をすることを薦めます。

専門のことはその分野を専攻したらいずれ勉強しなければなりませんし、専門のコースに入ったなら、それこそ専門外の分野を勉強する機会はめっきり減ってしまうことでしょう。それならば、脳の勉強をしなくてもよい今のうちにさまざまな分野に目を広げておくことが重要ではないでしょうか。

研究者には専門領域を超えた幅広い知識や考え方が必須です。だれでも思いつくような安易なアイデアのみでは大発見にはなかなか恵まれないでしょう。個性あふれるアイデアは、やはりその人がどれほど多様な分野に精通しているかにかかっていると思います。三つ目の質問は「どうしたらすばらしい発見ができるのか」です。残念ながらこればかりは私にもわかりません。もしわかったのならば、私ももっと楽に業績があげられるはずですよ。ただ、助言できることはありません。それは「問題意識」です。

薬学部で私が配属された当時、研究室を統括されていた齋藤洋教授は、嘔吐の研究で国際的な知名度を誇っていました。理由は「嘔吐する小型動物」を発見したからです。この意味がわかるのでしょうか。これはとても画期的なことだったのです。

ヒトは乗り物酔いや食中毒などではしばしば吐きます。ペットを飼っていた人ならば知っていると思いますが、イヌやネコもまたヒトと同じように吐きます。一方、研究者がよく使う実験動物であるネズミやウサギはけっして吐きません。吐くための脳回路が備わっていないからです。要するに「制吐薬」や「吐き気止め薬」の研究にはラットやマウスが使えないわけです。そこで嘔吐の研究にはイヌやネコ（ときにはヒト）を実験台として使わなければなりません。これはデメリットです。イヌやネコはネズミよりも大型の動物ですから大規模な飼育施設が必要ですし、そもそも一日に何匹（何人）も検査することができません。また効能を調べたい試薬や薬物も、多くの量が必要になります。

II、嘔吐の研究の現場では「小型で嘔吐する動物」が必要とされていたのです。

そんな中、齋藤教授は当時、「スunks」とよばれる体長一五センチメートルほどの小型の動物（南日本から台湾にかけて生息するモグラの一種）を用いての肝臓の研究をしていました。ある日教授は、肝硬変がいかにかに生じるのかを調べるために、スunksにアルコールを投与しました。するとスunksが吐いたのです。驚いた教授は周囲に「スunksは吐くぞ！」と興奮しながら言いました。

すると周囲の人々は「何を今さら」と言った表情で「そりゃ、そうですよ」と平然と答えたそうです。

このとき齋藤教授と周囲の研究者の違いはなんだったのでしょうか。そうです。齋藤教授は「問題意識」をもっていたのです。嘔吐の研究には今どんな問題があった、何が望まれているのかを知っていたのです。一方、周囲の研究者たちはこれまでも何度もunksが嘔吐する様子を見てきたにもかかわらず、それが嘔吐研究にどれほど重要な意味があるのかを理解していなかったのです。その後、unksが国際的な実験動物となって嘔吐研究に貢献したのは言うまでもありません。

「発見」とは単に「初めて見る」という意味ではありません。「ただ見る」だけでは発見ではありません。目の前に見えている事実の重要性に気づいてこそ「発見」なのです。

重要性に気づくためには「問題意識」をもっていなければなりません。一体、自分は何を知りたいのか、世間が何を欲しているのか、何がまだ解明されていないのか、どんな事実がわかればその後どんな道が開けるのか。こうした問題意識をもっていなければ発見はありません。

その一方で、発見が「偶然」に支えられていることも多々あります。齋藤教授もunksにアルコールを投与するという実験を偶然に行なったからこそ、大発見が訪れたのです。しかし、この発見が「単なる偶然」ではなかったことは、周囲の平凡な研究者が同じ事実を見ていたのに「発見」できなかったことが物語っています。

発見や発明のアイデアは神様が与えてくれるものではありません。Ⅲ、それまでにどれほど努力と勉学を重ねてきたかにか

かっています。科学者はこれを「セレンディピティー (serendipity)」とよびます。思いがけない発見をする才能。単なる偶然ではなく、訪れた幸運を自分のものにできる能力。発見は周到に準備した者だけに訪れる——絶対に忘れてはならない研究者の戒めです。

さて、話題をヒッチコックにもどしましょう。ヒッチコックがハリウッド映画史を代表する監督であることは万人が認めるどころでしょう。その生涯に五〇を超える映画を撮りました。Ⅳ、意外に思われるかもしれませんが、彼はアカデミー監督賞を一度

も受賞していません。彼ほどの巨匠が、なぜか名誉あるアカデミー監督賞には無縁だったのです。

ヒッチコックは「無冠の帝王」とよばれています。実力は一級なのだが、賞には恵まれなかった悲運の監督——このよび名にはそんな意味がこめられているのかもしれない。本当は彼こそが一番なのに、と。でも本当にそうでしょうか。彼ほどの才能があるのなら、狙えばアカデミー賞はとれたのではないのでしょうか。私にはむしろ、彼はそれほど受賞を望んではいなかったのではないかと思えてなりません。

受賞するためには審査員たちに認められる必要があります。そのためには当然、審査員の嗜好に合うような映画を撮らねばなりません。彼がアカデミー賞をとらなかつたという事実は、まぎれもなく、彼が大衆に迎合した映画づくりをしなかつたことを意味してはいないでしょうか。自分の芸術信念を歪めてまで媚びたくない、賞などは俗世間の価値基準にすぎない、と。

(中略)

④ ヒッチコックのような自分に負けない資質は、私たち研究者にも重要なものです。研究の目的は「真理の探索」です。真理を明らかにしたいという欲求は、世俗的な願望とは明らかに一線を画しています。大金持ちになりたいとか、有名になってテレビに出たいとか、楽な人生を無理せずのんびり過ごしたいとか、美男美女とデートして結婚したいとか、そんな気持ちが少しでもあつたら「真理」はこちらを向いてくれません。セレンディピティーは、謙虚に準備しつづける者だけにやってくるのです。甘い誘惑に打ち勝てる強い心をもつた人、そして、真実の探索に情熱を燃やすことのできる人。そんな若いみなさんこそ科学の世界に飛びこんでほしいと思います。そこにはみなさんが今までに見たことも感じたこともない興奮の世界が待っています。

(池谷裕二「いま、この研究がおもしろい」岩波ジュニア新書)

- 注1 既存……………すでに存在しているということ。
- 注2 高揚感……………気持ちが高まること。
- 注3 醍醐味……………深い味わい。本当のおもしろさ。
- 注4 巨視的……………全体を大きくつかんで見るさま。
- 注5 統括……………別々になっているものをまとめること。
- 注6 肝硬変……………肝臓の病気の一種。
- 注7 嗜好……………このみ。
- 注8 迎合……………自分の考えを曲げてでも、他人の気に入るように調子を合わせること。

問一 文中の空欄 I Ⅳ に入る語句として最も適切なものを次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。

- 1 たとえば
- 2 しかし
- 3 ところで
- 4 また
- 5 むしろ
- 6 つまり

問二 ……線部ア～エの語句を言い換えたものとして最も適切なものを次の中から一つずつ選び、番号で答えなさい。

- 1 欠点
- 2 進路
- 3 主眼点
- 4 事例
- 5 特典
- 6 過程

問三 ……線部①「もし何かの専門職に就きたいのならば、就職前はあえてその専門以外の勉強をする」とありますが、筆者がどのように「薦め」るのはなぜですか。その理由を本文から一文で探し、最初と最後の五字をそれぞれ抜き出して答えなさい。

問四 ……線部②「齋藤教授は『問題意識』をもっていたのです」とありますが、齋藤教授の研究で抱えていた問題とは何ですか。解答欄に合わせて、本文から三十字程度で探し、最初と最後の五字をそれぞれ抜き出して答えなさい。

問五 ……線部③「単なる偶然」とありますが、「偶然」と何が違うのですか。その違いを説明したものととして最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 ある事実に対して、「偶然」は努力によってアイデアに出くわすことで、「単なる偶然」はたまたま新しいアイデアに出くわすという違い。
- 2 ある事実に対して、「偶然」は問題意識を持つていることで発見をとまなうことで、「単なる偶然」は何の発見もない事実にとどまるという違い。
- 3 ある事実に対して、「偶然」は思いがけない発見に出会うことで、「単なる偶然」は何の発見もないままになってしまいう違い。
- 4 ある事実に対して、「偶然」は事実の重要性に気づくことで、「単なる偶然」はただその事実を知っているだけになるという違い。
- 5 ある事実に対して、「偶然」は周到に準備した者に訪れる幸運のことで、「単なる偶然」は訪れた幸運を自分のものにできないという違い。

問六 —— 線部④「自分に負けない資質」とありますが、ヒッチコック監督のどのような点にこの「資質」があるといえるのですか。三十字以内で答えなさい。

問七 本文の内容を説明したものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 研究をしていきたいのであれば、その分野に精通しておくが良い。
- 2 研究は、様々な分野で目的別に行われるのが最も一般的である。
- 3 研究の快感は、この世で一番新しいものを知ったときなどに感じられる。
- 4 「問題意識」を持たない研究者は、研究者とはいえない。
- 5 科学の世界に飛び込むには、謙虚な気持ちが必要である。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 ※本文は出題の都合上、原文を一部省略・改変してあります。

一月のある夕方、さゆきは駅前商店街のあたりで、道に迷い、^①途方に暮れていました。

果物屋さんで買ったばかりの一袋のレモンを抱きしめて、行き交うおとなたちの間で身を縮めながら、あたりを見渡していました。

「……(こ)こって、ど(こ)なんだろ(う)っ?」

駅のそばにある時計屋さんのビルの光る時計、あれは見覚えがある気がします。電車が上を通っている橋のそばにあるお花屋さんも。でも……ええと、どうだったかな?

風早駅のそばの、駅前商店街。この街に引越してきてから、まだ一週間くらいですが、家の近所のこのあたりの道は、もう覚えたりしていました。だから、さつき、レモンがないとママが言ったとき、すぐに、「わたしが買ってくるね」と、家を出たのでした。ママは、「夜が近いから、行かなくてもいいわよ」って、言ってくれたのに、大丈夫すぐに帰る、駆けだしてきてしまったのでした。

「(う)うっし(う)うっし……お家に早く帰らないと、ママもパパも、きつと心配しちゃう……」^②
もう四年生なのに、道に迷うなんて。もしかして、もしかして、ママが嫌いで、わざと帰るのが遅くなったなんて誤解されたらどうしよう?

抱きしめた袋から、レモンのいい匂いがしました。ママの香水の匂いに似ていました。

さゆきは、いっしょに暮らし始めたばかりの、新しいママのことを思いました。明るい笑顔と優しい声。いつもさゆきのことを喜ばせようって考えてくれている素敵なお姉さん。

あの人を傷つけようなんて、ぜんぜん思ってもいないのに、もし、^{かんちが}勘違いされたら。

(勘違いして、誤解して、ママ、わたしのこと、嫌いになったり、しないよね?)

人通りの多い駅そばの道。通り過ぎるのは知らない人ばかり。空は暗くなっていくばかり。さゆきは空に光る時計を見上げながら、^③少しうなずいて、歩き始めました。じっとしていても、家には帰れません。歩いているうちに、道を思い出すかもしれませぬ。

(このレモンは、今日の晩ご飯のために必要なんだもん。チキンサラダのドレッシングに入れるんだって、ママ、言っても早く帰らなきゃ。ママが待ってるんだから)

ぎゅっと握りしめた手は汗ばんでいました。吹き過ぎる冬の風が冷たくて、ふと、その寒さが懐かしいような気がしました。^④

この街に来る前、二週間の冬休みの間過ごした、田舎のおばあちゃんの家。昔に死んだママの故郷の家。そこはここよりも北の山の中にある村なので、雪がどっさり降り降って氷のような風が吹いていました。童話の中に出てくるような大きな森がありました。

さゆきは物語の本が好きでした。でもその冬休みは本を持っていくのを忘れました。

小さな村で、いっしょに遊べるような年齢の子ともいなかったもので、さゆきは森の中にあつた空き地のような場所で、雪だるまを二つと雪うさぎを一羽作って、お話しをして遊びました。おばあちゃんとおばさんにお弁当を作ってもらって、よんで食べているつもりになったり、冒険の旅をしているつもりになったりしました。

炭の切れ端で、笑顔の形に目と口を作った、大きいと少し小さいのと、二つの雪だるま。枯れ木で作った二本の腕。そして切り株の上に置いた、小さなかわいい雪うさぎ。

大きい方の雪だるまは、おっとりとして頼りになる、みんなのお兄さんみたいな人。小さい方の雪だるまは、ハンサムだけど、ちょっとぎざな次のお兄さんみたいな人。小さな雪うさぎは、かわいくて甘えっ子で、でも勇気がある、みんなの末っ子みたいな子。

さゆきの想像の中で、さゆきと雪だるまたちと雪うさぎは、妖精の国や、不思議な魔法使いの国を旅しました。ジャングルで命がけの冒険をしたり、大海で優雅な船旅をしたりしました。雪降る森の中にも、砂漠に張ったテントの中で、熱いジャスミンティーを飲んでいる気持ちになったりしました。——おばさんがポットに入れてくれたジャスミンティーは、さゆきだけが飲んだのですけれど。雪だるまたちは溶けてしまいますからね。

編み物が得意なさゆきは、おばあちゃんから古いモヘアの毛糸をもらって、夜、家にいるときに、雪だるまたちと雪うさぎに、おそろいのマフラーを二本編みました。^{注1}

どنگりと、金と緑のモールの飾りをつけた、赤いふわふわのマフラーは、雪だるまたちと雪うさぎに、素敵に似合いました。^{注2}

さゆきは、さんんに、きれいにマフラーを巻いてあげながら、言いました。

「これはわたしたちの友情の証。絶対に大切にしなくちゃだめなのよ」

さゆきは、冷たい風が吹く空を見上げました。高いビルの間に見える、冬の白い空を。

この空は、あの森と続いているはずです。あの森の上にあつたのと同じ空のはず。でも、懐かしいあの雪の森からは、永遠に近いほど遠い場所に思えました。

(……あの森に、帰りたいなあ)

(……雪うさぎさんたち、どうしてるかな?)

(中略)

だから二週間の冬休みの間、亡くなったママの田舎のおうちにひとりきり預けられていても、楽しく待つことができるので。おばあちゃんとおばさんと猫といっしょに、大きなこたつに入ったり、厚くて重たいお布団で眠ったりしながら、冬休みの終わりを待っていることができたのです。

「冬休みが終われば、わたしには、ママができるのよ。きれいで優しくて素敵なママが。ママとパパとわたしは、新しい街のかわいなおうちで、三人で楽しく幸せに暮らすの」

雪うさぎにお話ししていると、二つの雪だるまは、さゆきと雪うさぎを見て、にこにこ笑っているように見えたのでした。よかつ

たね、と言うように。

さゆきは、ふう、とため息をつきました。

夕暮れの街角で。ひとりぼっちで。

(森に帰りたいな。あの森に帰りたい。雪だるまさんたちと雪うさぎさんに会いたい)

(この街は、大きすぎて、ちよっと怖いよ……)

大きな街は、夕暮れどきになると、よけいに広く、知らない都会に見えました。行き交う人たちが、みんな冷たい、自分とは縁のない人たちに見えます。異世界の人みたい。

(この街で、お友だち、できるのかなあ……)

三学期になってから、この街の学校に転校してきました。新しい学校に通って一週間になりますが、最初の頃、風邪を引いて休んだこともあって、まだ学校に慣れていませんでした。クラスのみんなは優しいけれど、友だち、と言える人は、まだいません。

さゆきは、内気で、引っ込み思案な子どもでした。冗談を聞いたり話したりするのも、あんまり得意じゃありません。生まれたときから住んでいた小さな町では、みんなの中に入っていくことができませんでした。休み時間は、図書室で、ひとりで冒険ものの本を読んでいます。……でもほんとは、クラスのみんなと仲良くしたり、遊びに行ったりできたらなあ、と思っていたのです。お話の世界に出てくる、素敵な友だち同士みたいに。

だからさゆきは、今度の街に行ったら、友だちを作ろうと思っていました。自分からみんなに声をかけよう、みんなと話せる女の子になろう、そう、心に決めていたのです。

でも――。

(この街でも、ずっとお友だちができないままだったら、どうしよう……)

(またずっと、ひとりぼっちだったら……)

森の奥の友だちが懐かしくなりました。

最後に森で手を振った、そのとき、雪うさぎと雪だるまたちは、笑顔でさゆきを見送ってくれたようでした。雪が静かに降るあの森で、雪だるまたちも雪うさぎも、森の奥の空き地で、あのままの姿で、たたずんでいるのでしょうか。首におそろいの赤いマフラーを巻いて、金銀のモールとどんぐりの飾りを得意そうにきらめかせて。

うつむきながら、歩いているうちに、ふと、足下のアスファルトに赤い灯りが映っているのが見えました。

目を上げると、そこは、人気のない路地でした。つい今まで、華やかな商店街の、ショーウィンドウの灯りに照らされて歩いてきたような気がしたのに、いつのまにか、静かな古い路地に、入り込んでいたのです。

「アハ……アハ」

心臓がドキドキと鳴りました。ほんとうにまったく知らない場所に来ていたのです。

しんとした道には、水の匂いがしました。どこかで水が流れる音が聞こえるような気がするので、近くに水が湧いている場所があるのかもしれませんが。お線香の匂いもしません。

冷たい風が吹き渡る道のあちこちには、たくさんの古くて赤い鳥居がありました。

鳥居の群れの向こうの暗がりに、曲がり角があるようです。そのあたりに、赤い光が灯っていました。夕日のようなあたたかい光でした。

もうあたりは夜の色に空が暗くなっていました。道のあちこちに、薄闇がたまっています。さっきまであんなに明るい、人通りがあるにぎやかな場所にいたはずなのに、いつのまにか、ひとりぼっち。さゆきは、灯りにひかれるように、その路地の方へ向かいました。

薄暗がりの中に、赤い看板がありました。稲穂のマークが入った、四角い灯りです。「コンビニたそがれ堂」と書いてあります。ほっこりした色の光が灯る、明るいお店が、そこに建っていました。ガラスの窓越しに、店内の様子を見ると、中には何人かお客さんがいるみたいです。とてもあたたかそうでした。

「あ、そうか。コンビニだったら……」

ここで、お店の人に、道を聞けばいいのです。

ガラスの扉を押して開けると、ふんわりといい匂いがしました。おでんの匂いです。

明るい店内の入り口近く、レジのところにお兄さんが、「いらっしやいませ、こんばんは」と、歌うように言いながら、笑顔で声をかけてきました。

「こ、こんばんは……」

びっくりしたのは、そのハンサムなお兄さんが、長い銀色の髪と透き通る金色の目をしていたからでした。店員さんらしく、赤と白のしましまの制服を着て、おそろいの帽子をかぶっていますが、なんだかあまりコンビニの店員さんという感じではありません。でもじゃあ制服が似合っていないかというところというのではなく、この若いお兄さん以外に、この制服をばっちり着こなせる人はいないんじゃないかと思えるほど、かっこよく似合っているのです。

そのとき「こつて、童話の世界みたいだな」と思ったのは、なぜだったでしょう？

たそがれ堂は、さゆきの目には、あたたかく懐かしく、かわいいお店に見えました。

おでんの鍋から立ちのぼるあたたかな湯気のせいで、店内がほんわかと、クレヨンや色鉛筆で描いた情景のように見えたからかもしれない。

日差しのような穏やかな色の、店内の灯りのせいだったかも。あるいは、寒さに凍えて店に入った迷子のさゆきを、心配そうに見ている、お客さんたちの優しいげな雰囲気、どこかメルヘンの世界にありそうな、柔らかい優しい雰囲気かと思えたからかもしれません。

そして、気のせいでしょうか？このコンビニ全体が、優しく柔らかく、さゆきを迎えてくれているような気がしたのです。

『いらっしやいませ。外は寒かったね。道に迷って、辛かったね。ここはあつたかいから、ちよつと休んでいきなさい。さあ』と。一番優しくあたたかく感じるのは、レジの向こうにいるお兄さんの笑顔でした。春の光がきらめくような色の髪と、瞳でした。

「さあさあ、かわいいお兄ちゃん、なにを探しに来たのかな？」

レジのおでんの鍋をかき混ぜながら、歌うような感じで、その人は言いました。

「道を——わたし、あの、帰り道がわからなくて。急いで帰らないといけないのに……」

「はあい、了解。じゃあまずはおいしいおでんをどうぞ」

お兄さんの手が、串にさしたはんぺんを差し出しました。王子様がお姫様にばらの花を差し出すような、そんな優しさと優雅さで。

「これは、新しい味付けにチャレンジして見た試作品だから、お代は無料がいいからね」
「え。あ……ありがとうございます」

さゆきははんぺんを受け取りました。夕ご飯はまだでしたから、ふわりとあがる湯気の匂いを感じたとき、おながが鳴りました。火傷しそうに熱い三角形のはんぺんを、端から少しずつかじると、口の中にじわっとおいしい出汁の味が染み渡っていききました。冷えたからだがほかほかとあたたまります。

「……おいしいです。ありがとうございます」

もう一度、さゆきはお礼を言いました。

「さてさて。お兄ちゃんのうちには、どのへんにあるのかな？」

お兄さんは、さゆきに家の住所を聞くと、レジにあったメモ帳に、ボールペンで、さらさらと描いてくれました。

「店を出て、ちよつと歩いたら、駅までの道にでるから、そしたらこう行けば帰れるよ」

「ありがとうございます」

さゆきはまたありがとうございますと言いました。受け取った地図は、青いインクで描かれているのですが、ときどき虹色に光るようでした。

注1 モヘア……アンゴラやぎの毛。また、それで織った毛織物。

注2 モール……飾りつけや造花などに用いる、毛の立ったひも類。

問一——線部①「途方に暮れる」とありますが、これと同じような意味の四字熟語として最も適切なものを次の中から一つ選び、

番号で答えなさい。

- 1 日進月歩
- 2 言語道断
- 3 一日千秋
- 4 自業自得
- 5 右往左往

問二——線部②「ママが嫌いで、わざと帰るのが遅くなったなんて誤解されたらどうしよう」とありますが、さゆきがこのよう

な心配をする理由を説明したものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 いつもさゆきのことを考えてくれる、素敵なママだから。
- 2 帰るのが遅くなってしまうと、ママにひどくおこられるから。
- 3 レモンのいい匂いによって、ママのことが愛おしくなったから。
- 4 家族で暮らし始めて日が浅く、新しいママに慣れていないため。
- 5 ママに「行かなくてもいいわよ」と言われたのに、強がって家を出たから。

問三

——線部③「少しうなずいて、歩き始めました」とありますが、この「さゆき」の動作にはどのような気持ちが表れていますか。最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 見覚えのある時計に向かってまっすぐ進めば絶対に道を思い出すのだと自分に言いかけせる気持ち。
- 2 母親は明るく優しい人なので、自分を嫌うはずなどないと自分の思い過ぎを否定する気持ち。
- 3 絶対に必要なものを買った自分の帰りを皆が待ち望んでいるという自信にあふれた気持ち。
- 4 道に迷ったこととまどっているよりも自分から行動しなければならぬと決意する気持ち。
- 5 このまま進んでいけばきっと知っている人に出会い、助けてもらえることを信じる気持ち。

問四

——線部④「手は汗ばんでいました」とありますが、寒いにもかかわらず「手が汗ばんで」いるのはなぜですか。その理由を三十字以内で答えなさい。

問五

——線部⑤の「その寒さが懐かしい」とありますが、さゆきが「懐かしい」と感じている「寒さ」とはどのような「寒さ」ですか。六字以上十五字以内で答えなさい。

問六 —— 線部⑥「あの森に帰りたいなあ」とありますが、「さゆき」がこのように思うのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 森の中の雪だるまや雪うさぎに巻いてあげたマフラーがそのままの姿で残っているのかを確かめたいから。
- 2 クラスのみんなもやさしいけれども、森がある田舎に住んでいるおばあちゃんのやさしさが忘れられないから。
- 3 森のある街から引越してきたばかりのさゆきはまだ新しい街になじめず、新しい街や友人関係に不安を感じているから。
- 4 物語好きなさゆきは森の中だけを自分の居場所だと思い込んでおり、都会は自分の知らない異世界にしか感じられないから。
- 5 森の中には亡くなったさゆきの母親の家があるのでなつかしいうえに、そこでは友だちと雪遊びもできて楽しいから。

問七 〰〰〰線部のように「三人」と「さんじん」が漢字とひらがなで使い分けられています。その違いを五十五字以内で答えなさい。

問八 —— 線部⑦について以下の問いに答えなさい。(1)この部分に使われている表現技法として最も適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。また、(2)なぜこのような表現を使っていると思われるか。その理由を文中の語を使って三十文字以内で答えなさい。

- 1 擬人法
- 2 直喩(明喩)法
- 3 暗喩法
- 4 対句法
- 5 反復法

(余 白)

